

日本の歴史の中の『聖母像』-2



「ご聖体の連禱と黙想の図」 安土桃山時代（1592年）

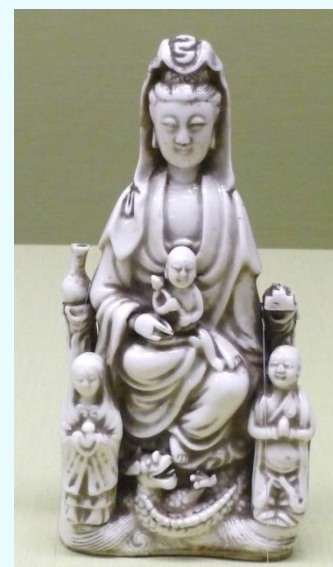


「雪のサンタマリア」 江戸時代前期（1632年以降）

前回のテーマ

喜びと悲しみを共にしつつ、16世紀から現代まで日本の姿を見つめてきた数々の「聖母像」。その御像の歩んだ数奇な物語と背景となった歴史を紹介しました。

- I 椿を持つ聖母＝右近の山里の「マリア十五玄義図」
- II 「親指のマリア」＝鎖国下での白石との出会い
- III 潜伏キリシタンと共に＝白磁の「マリア観音」
- IV 平和への使節＝浦上の「被爆マリア」



I 椿を持つ聖母＝右近の山里の「マリア十五玄義図」＝



原田家本「マリア十五玄義図」

高槻・茨木の奥座敷ともいべき千提寺と下音羽の山里は、キリシタン大名・高山右近が高槻城主だったところより明治維新まで高槻藩の隔領地だったといわれ、潜伏キリシタンが存在した可能性があったものの、禁教時代からの秘匿の守りは堅く、その確認はできなかったませんでした。

その後1919年（大正8年）、キリシタン研究家の藤波大超氏が千提寺の山林（通称クルス山）でキリシタン墓碑を発見、その土地の地主の東家を尋ねたところ、「昔から秘密の物が伝えられている」ことがわかり、「あけずのひつ」の中から後に世界的に有名になった「ザビエル像」や「マリア十五玄義図」がなどの遺物が発見されました。

さらに1930年（昭和5年）、下音羽の原田家からも屋根葺中、すすけた竹筒から完全な保存状態の「マリア十五玄義図」が見つかります。この椿を持つ聖母像です。

そして千提寺・下音羽のそのほかの家からも次々とキリシタン遺物が見つかったほか、80歳を越す三人の女性が最後の潜伏キリシタンとして、先祖から伝わった祈禱文や宗教儀礼を語ったといわれます。。



掛軸に表装され、竹筒に入っていた

II 「親指のマリア」＝鎖国下での白石との出会い



この絵は、カルロ・ドルチが描いた神々しいほどの悲しみが表現された美しい聖母像「親指の聖母」です。

その画像を携えて、イタリア人教区司祭だったジョバンニ・シドッチは、1708年鎖国下禁教百年近くになる日本に潜入し、上陸した鹿児島で捕らわれ、江戸切支丹屋敷（山屋敷）に護送されます。

この知らせをきいて幕府の重臣新井白石はシドッチの取り調べに当たりました。

この逸材二人の出会いは、立場、信条の相違をふまえながらも、互いの尊敬と信頼に満ちたものでありました。

Ⅲ 潜伏キリシタンと共に＝白磁の「マリア観音」



鎖国になる頃、福建省から長崎の港に、白磁の慈母観音像がもたらされました。

その子を抱く姿に注目したのは、当時の中国での地域文化への適応を推し進めたイエズス会宣教師マテオ・リッチです。

その白衣は、聖母の純潔を象徴し、幼子はイエスを表すとされ、「東アジア型聖母像」として、当時の潜伏キリシタンの霊的需要を満たしたといわれます。（若桑みどり『聖母像の到来』）

宣教師のいない閉ざされたキリシタン共同体と各家々にも、その像は聖母子像として受け入れられ、祈りの対象とされていきました。

「迫害の中の7世代250年、キリシタンたちは、このような慈母観音像をマリアさまとして聖母マリアに祈り続けた。

それが1865年大浦天主堂における神父との出会いを実現する原動力となったのである。」

（大浦天主堂キリシタン資料館展示から）

IV 平和への使節＝浦上の「被爆マリア」



「浦上四番崩れ」は明治新政府により、浦上のキリシタン信徒が村ぐるみ流罪に処せられた事件です。その「四番崩れ」で壊滅し、復興した町は、再び原爆でという「五番崩れ」で廃墟となりました。

浦上への原爆投下から1週間後、人々は戦争の悲惨さと愚かさにとやっと気づき、奇しくも聖母被昇天の日、大戦は終結します。

その惨禍をじっと見ておられた「マリア像」がいま、浦上大聖堂右陣の小聖堂に祀られていました。

被爆直後、復員した一神父の手によって廃墟から救い上げられ、その三十年後に浦上に戻されたマリア像。

首から上だけ残るこの頭像は、今、「被爆マリア」と呼ばれ、平和への祈りの象徴となっています。

今回のテーマ

最近の調査研究で明らかになった日本人の筆による二つの「聖母」像を取り上げます。

I 「ご聖体の連祷と黙想の図」

= 聖母と聖体への崇敬と祈りを込めた日本最古のキリシタンの絵巻物

II 「雪のサンタマリア」

= ローマからシチリアへ、そして日本へ伝来した「雪の聖母」伝説

31 社会 13版 2018年(平成30年)11月19日(月)

16世紀のキリシタン信仰画？

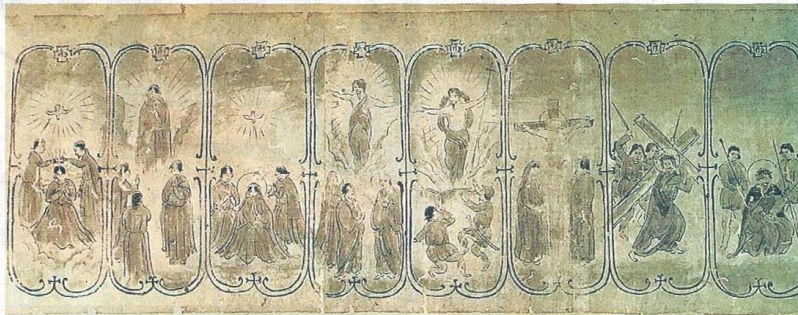
神奈川県大磯町の「澤田美喜記念館」で収蔵されていた出所不明のキリシタンの信仰画が、16世紀末の安土桃山期の作品である可能性が高いことがわかった。当時の信仰画に残っているものがごくわずかで、国内に信者が増えた時期の信仰の姿を伝える貴重な資料とみられる。

記念館などによると、和紙に墨で描かれた巻物で、縦22センチ、横約320センチ。「受胎告知」や「受難」「聖母の戴冠」など15の場面がある。ラテン語の祈りの言葉も仮名で書かれている。「御出世以来千五百九十二年（はろ）とも記されており、「パウロ」という洗礼名の信者が西暦1592年に作ったとみることができるといふ。

記念館と共同調査した横浜歴史博物館によると、文字の書体や描かれた風俗には、江戸時代より前の特徴がある。記念館が外部の研究機関に放射性炭素を用いた年代測定を依頼したところ、1556～1633年に作られた紙との結果が出たという。

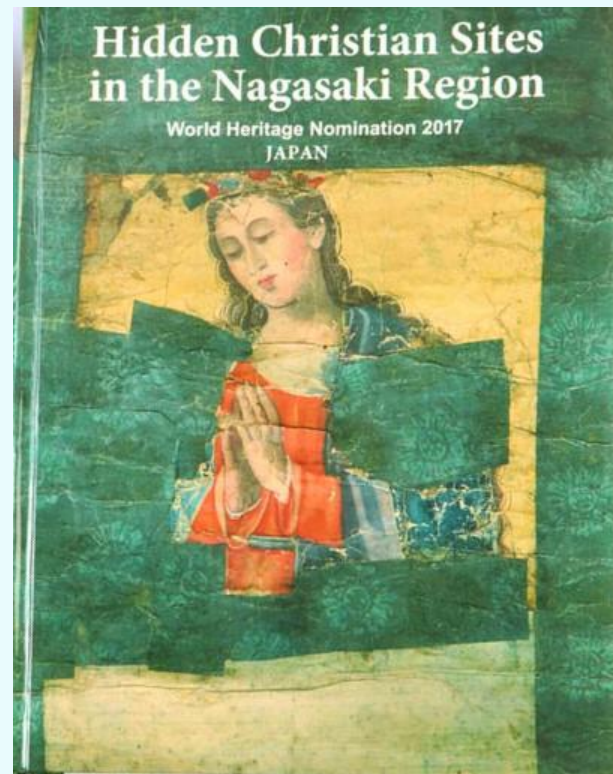
神奈川の記念館

安土桃山期の作の可能性が高いキリシタンの信仰画の一部。和紙に墨で描いた巻物で、人物や服装は日本的だ＝澤田美喜記念館提供



「当時の姿浮かぶ」日本風の作風

この作品は、1556年から1633年に作られたと推定される。当時のキリシタンの信仰画は、和紙に墨で描かれた巻物で、人物や服装は日本的な特徴がある。この作品は、当時のキリシタンの信仰画の貴重な資料とみられる。



世界文化遺産に登録された「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」の推薦書の表紙

プロローグ-1 渡りきた聖母像

- ・ フランシスコザビエルの到着は、1549年8月15日聖母マリア被昇天の大祝日
- ・ ザビエルは、アンジローとの対話で「彼ら（日本人）は理性に基づかなければ（信仰に）導かれない人々」の認識を持っていました。
- ・ 一般庶民のキリスト教受容を容易にしたのは、地獄と極楽の来世観からの救済でありました。
- ・ 改宗者は数珠や護符の信心用具に替わる聖画像やコンタス（ロザリオ）を強く求め、一度に五万枚もの聖画がヨーロッパに発注されたといわれます。
- ・ 特に聖母の画像は、領主層の女性（薩摩藩主の母など）に感動を与え、庶民層では聖画の奇跡（壱岐での大火で画像が残った、有馬で少女の病が癒えた）の話も流布していました。
- ・ 布教初期（第1期・1549～1579）は画像輸入時代で、「聖ルカの聖母」等の画像が大量にもたらされましたが、その後の禁教により残っているものはきわめて少ないのが現状です。



「聖母子」 東京国立博物館蔵



「聖母子」 東京国立博物館蔵



「ロレートの聖母」 茨木市中谷家蔵

プロローグ-2 日本人の筆による聖母像

・布教中期（第2期の1579～1614）は、ヴァリニャーノにより日本人聖職者養成や画像制作、出版事業が盛んに行われ、また信徒は最新のカテキズム（「祝福されたる神の母処女マリアの無原罪」1546公会議など）を深く理解していたと思われます。1600年ごろ、旧暦の元旦を「マリアの祭日」にしたといわれます。

・2018年11月、横浜市歴史博物館で「最古級の信仰画」と再評価された「ご聖体の連祷と黙想の図」（澤田美喜記念館蔵）は、日本人（修道士か）の筆による画文の個人用の巻物で、「御出世以来千五百九十二年はうろ」（1592年パウロ）の銘、「ロザリオの十五玄義」図とラテン語の祈禱文が仮名で記されています。

・禁教・迫害・潜伏期（第3期の1614～1873）の初頭、ジョバンニ・コーラ（＝ニコラオ）の指導を受けた優れた日本画家による作品制作が続けられていました。前回の講座で紹介した「マリア十五玄義図」（原田本）はその代表作として奇跡的に残された作品です。

・長崎市外海に伝えられた「雪のサンタマリア」（日本二十六聖人記念館所蔵）もセミナリオで学んだ日本人によって描かれたとされます。さて、その元絵は何に由来するのでしょうか。



「ご聖体の連祷と黙想の図」のマリア像



「マリア十五玄義」（茨木市原田本）



「雪のサンタマリア」

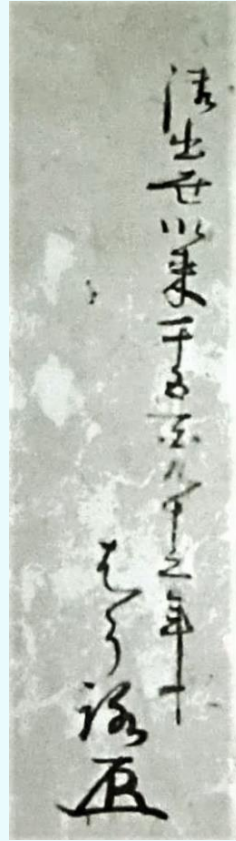
I 「ご聖体の連祷と黙想の図」＝聖母と聖体への崇敬と祈りを 込めた日本最古のキリシタンの絵巻物

「ご聖体の連祷と黙想の図」 (澤田美喜記念館蔵)

長さ320cmの卷子で、墨書で右から、

- ①聖母子像図
- ②ご聖体の連祷前半（ポルトガル訛りのラテン語祈禱文をかな書き）
- ③ロザリオを唱える際の黙想のための十五玄義図（喜びの玄義・悲しみの玄義・栄光の玄義各5場面）
- ④ご聖体の連祷の後半
- ⑤奥書

「御出世以来千五百九十二年 者う路
(はうろ)」すなわち西暦1592年「パウロ」の名と花押があります。



2018年11月19日のプレス発表で、16世紀末の安土桃山時代に制作された可能性が高いことが、所蔵する澤田美喜記念館、横浜市歴史博物館の調査で分かりました。

国内で現存する信仰画としては最古級で、墨の使用や、描かれている習俗などからより日本的といえます。

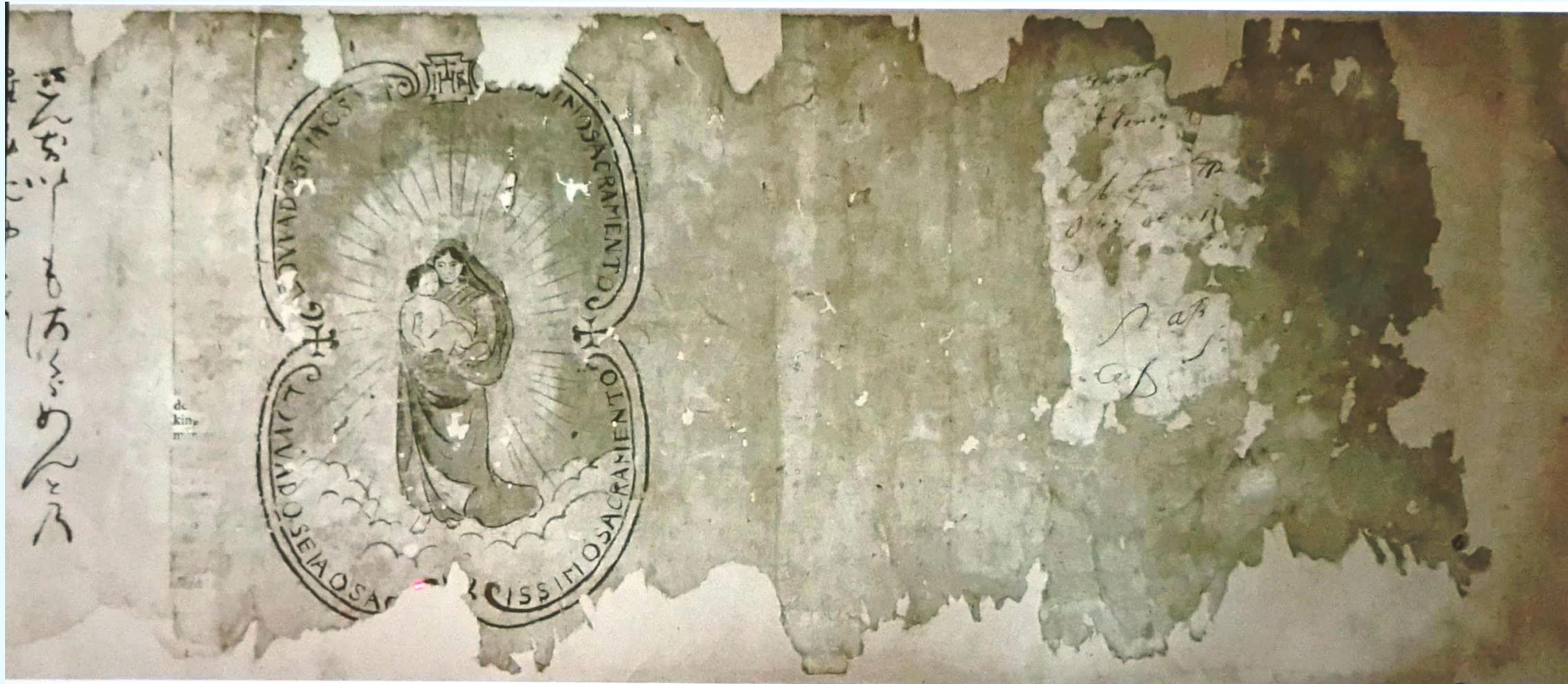
同年11月23日から横浜市歴史博物館「神奈川の記憶展」で、初めて一般公開され、26日には同館で、緊急調査報告会が開催されました。

2021年2月21日には、五島市での「世界文化遺産登録2周年」記念講演で、東京大学大学院の岡美穂子先生がこの資料について報告されています。

「ご聖体の連禱と黙想の図」-1

巻子の右端に描かれたマリア像

- ・上に「HIS」、周りの縁取りのアルファベットはラテン語で上に「聖なる秘跡への連願」、下に「いと貴き秘跡はたとまれたまえ」と書かれています。（下は「マリア十五玄義」図のラテン語文字に同じ）
- ・日本画の筆法の文字と絵。連禱文の前に尊像の絵があるのは、装飾経の伝統でしょうか？
- ・右の余白（見返し部）から二重に裏打ちされ、手書きのメモ（オランダ語か？）が見えます。
裏打ちの内側の紙に、1745年にアムステルダムで刊行された医学薬学の本を使っていたことが判明しました。

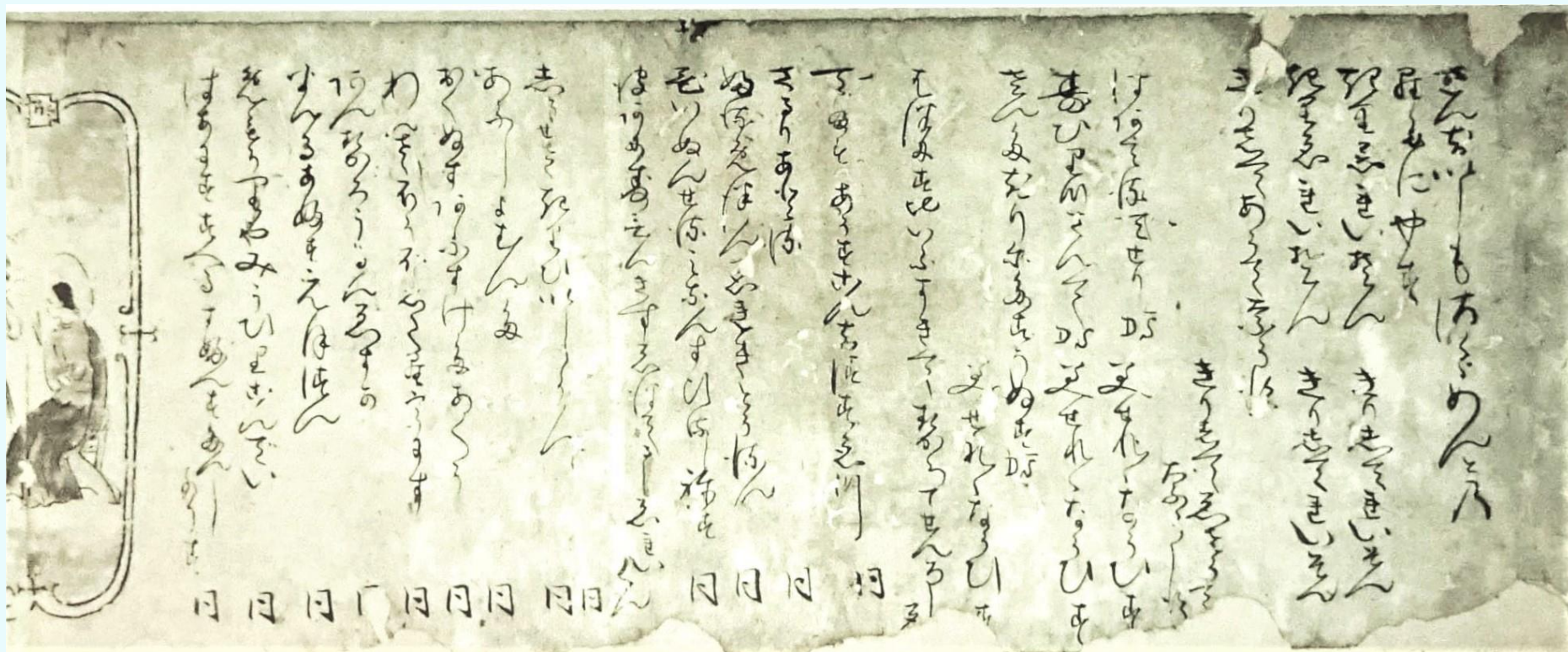


「ご聖体の連禱と黙想の図」-2

連禱文（ラテン語かながき）前半

「さんちいしもさからめんとの らたにやす （聖なる秘跡への連禱）

きりゑれいそん きりしてれいそん・・（主あわれみたまえ キリストあわれみたまえ）」



「十五玄義図」は、高山右近の里の大阪茨木市の潜伏キリシタンの家や長崎で見つかっています。

「聖体の連禱」はこれまで茨木市の一例だけで、この卷子で二例目となります。

伝えられたオラショでは「聖マリアへの連禱」（リタニエ）が主流でした。

「ご聖体の連祷と黙想の図」-3

ロザリオの喜びの玄義（神秘）」

右から、①マリア、神のお告げを受ける ②エリザベトを訪問する
③マリア、イエスを産む ④神殿でイエスをささげる ⑤見失ったイエスを見出す



「ご聖体の連禱と黙想の図」 -4

ロザリオの苦しみの玄義

右から、①イエス、ゲッセマネの園で苦しみもだえる ②むち打たれる
③いばらの冠をかぶせられる ④十字架を担う ⑤十字架に息をひきとられる



「ご聖体の連祷と黙想の図」 -5

ロザリオの栄えの玄義

- 右から、①イエス、復活する ②イエス、天にあげられる ③聖霊、使徒たちにくだる
④マリア、天の栄光に上げられる ⑤マリア、すべての人の母となる

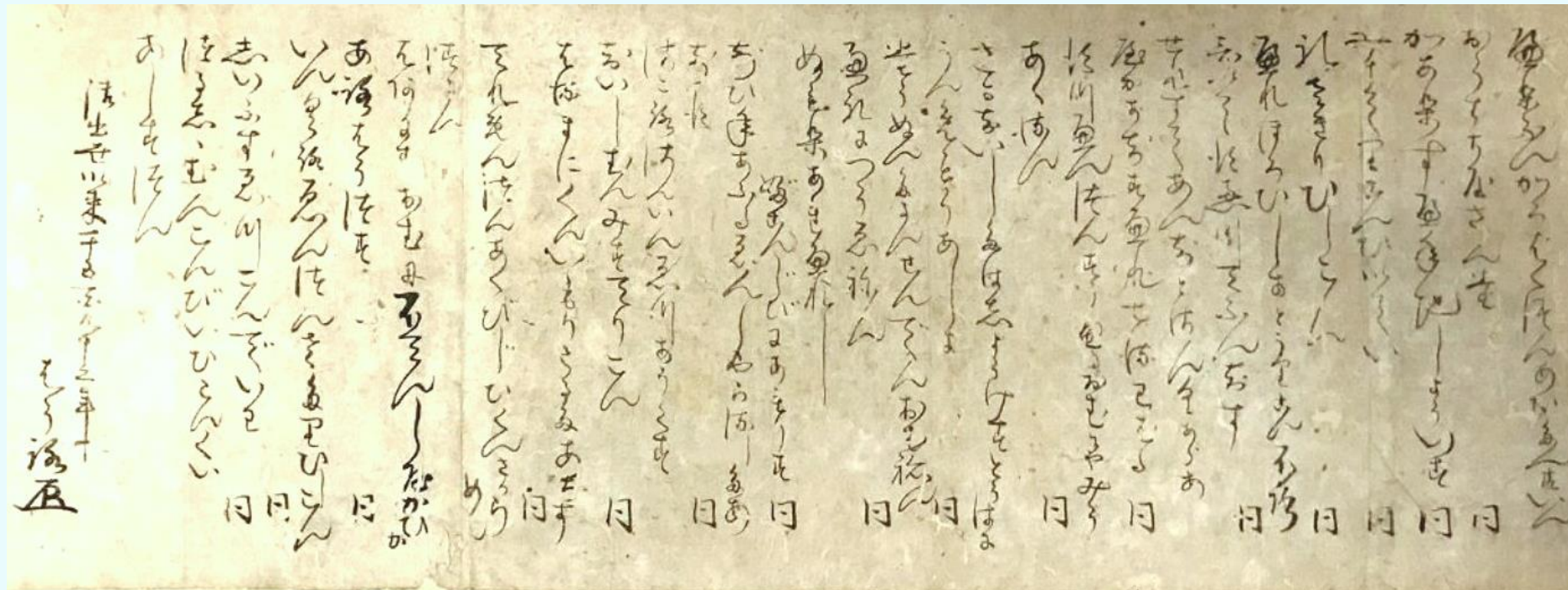


「ご聖体の連祷と黙想の図」 -6

連祷文後半

（「同」の箇所は 「みせれれ なうひす」（われらをあわれみたまえ）の繰り返し

奥書「御出世以来千五百九十二年 者う路（はうろ）」



「者う路」（はうろ＝パウロ）とは

「天草パウロ良印」か？

日本人修道士。1553 年頃、天草生まれ。1577 年にイエズス会に入会。五島のキリシタン布教のパイオニア。1592年から主に上方で布教。江戸時代初頭には、イエズス会の日本人修道士のトップ3に数えられ、家康とも度々 面談。高山右近と共にマニラへ渡り、同時期に死亡。花押が明朝体の中の文字がアルファベットの R に見える。（岡美穂子 2020. 2. 21講演レジュメから）

「ご聖体の連祷と黙想の図」-7

マリア像のルーツ

ラファエロの「システィーナの聖母」

(盛期ルネサンスの巨匠ラファエロ・サンティが、その晩年1513～1514年頃に描いた祭壇画)



「ご聖体の連祷と黙想の図」-8



十字架コレクション

澤田美喜記念館

Sawadamiki Memorial Museum

澤田美喜が蒐集した
**潜伏キリシタン
遺物コレクション**

刀の鉤コレクション

所蔵: 874点
展示: 約 300点

施設名 澤田美喜記念館
所在地 〒255-0003 神奈川県中郡大磯町大磯1152
電話 0463-61-4888
開館時間 10時～16時
休館日 月曜日（ただし、祭日は開館。その場合、翌日火曜日休館）、年末年始
入館料 一般 800円
高校生・大学生 700円
65歳以上 700円
中学生以下 無料
アクセス 東海道本線「JR大磯駅」下車 駅前料め右向かい（徒歩1分）※車でのご来場はご注意ください。

マリア観音像

「ご聖体の連祷と黙想の図」

エリザベス・サンダース・ホーム
エリザベス・サンダース・ホーム
エリザベス・サンダース・ホーム

https://www.sawadamiki-kinenkan.com/

澤田美喜記念館

エリザベス・サンダース・ホームを開設した澤田美喜が、生前40年にわたって九州（長崎、平戸、島原、五島列島等）のみならず、日本の津々浦々を巡って収集した隠れキリシタンの遺物が870点余りが収蔵されこのうち、250点余りが展示されています。

澤田美喜は施設運営が困難に出会うたびに、この遺物と向かい合い、迫害・弾圧を受けた往時のキリシタンの苦難を思い、自らを奮い立たせて神に祈ったと伝えられています。



「ご聖体の連禱と黙想の図」-9

「ご聖体の連禱と黙想の図」は、澤田美喜の伝記によれば、1957年ごろ、頻繁に生月島を訪ねていた澤田美喜が、戦争で息子を失った生月島のかくれキリシタン信徒から譲り受けたとのこと。

また生月壺部に伝わる納戸神には、足もとの描写がよく似た「御掛け絵」があります。

(岡美穂子 2020. 2. 21講演レジュメ)

壺部の村瀬家が所有していた聖母子像は、同家が他出する時カトリック教会に寄贈され、その後黒瀬ノ辻の祈念碑下の礼拝堂に祀られましたが、同図の裾のあり方は良く似ていて、幼子も右抱きですが、聖母が着物で胸をはだけている点は大きく異なります。また山田3垣内の御前様のモチーフは「聖母被昇天」ですが、最も古い隠居の中央の聖母子像は、幼子右抱きで左の裾を突き出し、「ひれ」を左側になびかせた表現がヴェールを膨らませた表現と通じる所があります。

(生月町博物館HP:生月学講座:「ラファエロとお掛け絵」)



「ご聖体の連禱と黙想の図」 -7

この巻子のテーマとは

- ・ 聖母マリアへの信仰
- ・ 聖体への崇敬、黙想と祈り
- ・ ロザリオの十五玄義の黙想



綸子地著色聖体秘蹟図指物（通称「天草四郎の陣中旗」）
聖体を礼拝している天使が描かれている。我が国の初期洋画家である山田右衛門作が原城内で描いたもの、あるいは禁教令以前のセミナリオで聖旗として描いたもの



銅版画「セビリアの聖母」...

慶長2年（1597）、有家のセミナリオ日本人画学生によって制作された1枚刷りの銅版画
明治2年（1869）プチジャン神父がマニラで発見し、日本に請来した。

下音羽原田家本
「マリア十五玄義図」

II 「雪のサンタマリア」＝ローマからシチリアへ、 そして日本へ伝来した「雪の聖母」伝説

・「雪のサンタマリア」（日本二十六聖人記念館蔵）

大きさは縦約28cm、横約22cm。和紙に聖母マリアが描かれ掛け軸に表装されて、長崎の外海の潜伏キリシタンの家に伝えられてきました。

この絵が世に知られるようになったのは1973年。「雪のサンタマリア」という画があると伝え聞いていた地元の歴史民俗資料館の田中用次郎氏が、持ち主の農家を説得し、結城了悟師、片岡弥吉氏ともに竹筒に入れて床下に隠されていたこの聖画を発見されたとのこと。

マリアの顔と胸元に合わせた手は鮮明に残っていますが、赤い衣と青いマントのほとんどは、紺地の補修紙に覆われてしまっています。髪が腰まで流れ、頭上には冠を頂いているのが特徴です。

この絵は「西洋的なマリア絵を日本の色彩と技法によって描かれている珍しい作品」と評価されました。



「雪のサンタマリア」-2

この「雪のサンタマリア」の絵については、近年にわかに注目され、映画「沈黙～サイレンス」のひそかな礼拝シーンに使われ、また2018年6月に世界文化遺産に登録された「長崎と天草地方の潜伏キリシタン関連遺産」の推薦書の表紙にもなりました。

2019年には文化財として、京都市の宇佐美修徳堂により修復も完了し、同時に作られた精巧なレプリカは、11月24日に来日された教皇フランシスコに献上されたとのことです。



映画「沈黙～サイレンス」シーン
(公式HP予告編から)



日本二十六聖人記念館を訪ねた教皇フランシスコ



修復が完了した「雪のサンタマリア」と
教皇に献納されたレプリカ
(産経新聞HPから)

「雪のサンタマリア」-3

この絵の名称は「雪のサンタマリア」。はっきりとその名で伝承されてきたこの絵の題名は、何に由来するのでしょうか。

東京国立博物館には、一見、真っ黒で図像が定かに見えない2枚の「聖母子像」の板絵があり、ともに長崎奉行所保管品とです。そのうち「雪のサンタマリア」の題名のある幼子の顔と放射状の光背が残る板絵は、もう一枚の全体の図像がはっきりしていて木額に入った「聖母子像」と同じであったと思われます。

この2枚の絵の元絵は、ローマのサンタマリア・マジョーレ聖堂の「サルス・ポプリ・ロマーニ」。聖ルカによって描かれたという伝承から「ルカの聖母」と、また大聖堂創設の由来伝説から「雪の聖母」とも称されたアイコンです。



東京国立博物館「聖母子像」



東京国立博物館
「聖母子像」（「雪のサンタマリア」）



ローマのサンタマリア・マジョーレ聖堂の
「サルス・ポプリ・ロマーニ」

「雪のサンタマリア」 -3

新型コロナのパンデミックの最中の2020年3月、フランシスコ教皇は、その終息を祈って徒歩でサンタマリア・マジョーレ大聖堂を巡礼し、「サルス・ポプリ・ロマーニ」のイコンの前で祈りを捧げられました。

また4月のバチカンのサンピエトロ大聖堂の復活祭ミサでは、祭壇にこのイコンが掲げられました。



グレゴリオ一世は、590年にペストが流行した際、このイコンを奉じて宗教行列を行い、ペストが終息したことから「サルス・ポプリ・ロマーニ」（ローマ民衆の救い）と呼ばれるようになったといわれます。

そして、1606年、ボルゲーゼ家出身の教皇パウロ5世により、このイコンを安置するため建てられたのが、サンタマリア・マッジョーレ大聖堂内のパオリーナ（ボルゲーゼ）礼拝堂です。

「雪のサンタマリア」 -4



サンタマリア・マジョーレ大聖堂
聖母マリアにささげられた聖堂で最大の聖堂。
教皇が建築させたローマの四大バシリカ（古代ローマ様式の聖堂）の一つ



「雪のサンタマリア」 -5

サンタマリア・マッジョーレ大聖堂創設の由来の「雪の聖母」伝説

西暦4世紀、ローマにジョヴァンニ夫妻という信仰深い貴族がいました。

夫妻は裕福だったが、彼らの間には子供がなかったことから、自分たちの富の相続人に聖母を選んびます。

教皇リベリウスはそれを知って、聖母に子供を授かる方法を尋ねるよう夫妻に提案し、夫妻はそれに従いました。

352年8月5日の夜、夫妻とリベリウスの夢に聖母マリアが出現し、（降雪量の少ないローマで）「雪が降る丘を目印にして、エスキリーノの丘の頂上に聖母の聖堂を建設するように」と命じました。

パオリーナの礼拝堂の「サルス・ポプリ・ロマーニ」のイコンの上に、この「雪の聖母」伝説を表したレリーフがあります。



「雪のサンタマリア」-6

16～17世紀のキリシタンにとって、サンタマリア・マジョーレ大聖堂の「雪の聖母」伝説は、よく知られた逸話であり、「暑い夏に雪が降る」という奇跡譚は、キリシタン民話の「雪の三タ丸屋」にも反映されています。

(朗読⇒<https://www.youtube.com/watch?v=5JH3e-RGm0k>)

しかし、外海で発見された「雪のサンタマリア」の図像は、「サルス・ポプリ・ロマーニ」(=「雪の聖母」)のアイコンのそれとは、全く異なっています。では、そのもとのなった絵は、何だったのでしょうか？

長崎のキリシタン民話「雪の三タ丸屋」

人々の救いのため、びるぜん(処女)の誓いを立てた美しい丸屋が、るそん王に目を留められ妃にと請われて困った時、丸屋が天に向かって静かに祈ると、暑い六月だというのに、天からちら雪が降り出してきて、見るまに五尺ほども地上に積った。(中略)そこへ天から美しい花車が降りてきて、丸屋を天に連れていってしまった。

天に昇った丸屋は、天帝から「雪の三タ丸屋」の名をもらい、「お前の汚れない清らかなからだを貸してもらおう」といわれて、再びこの世に戻される。

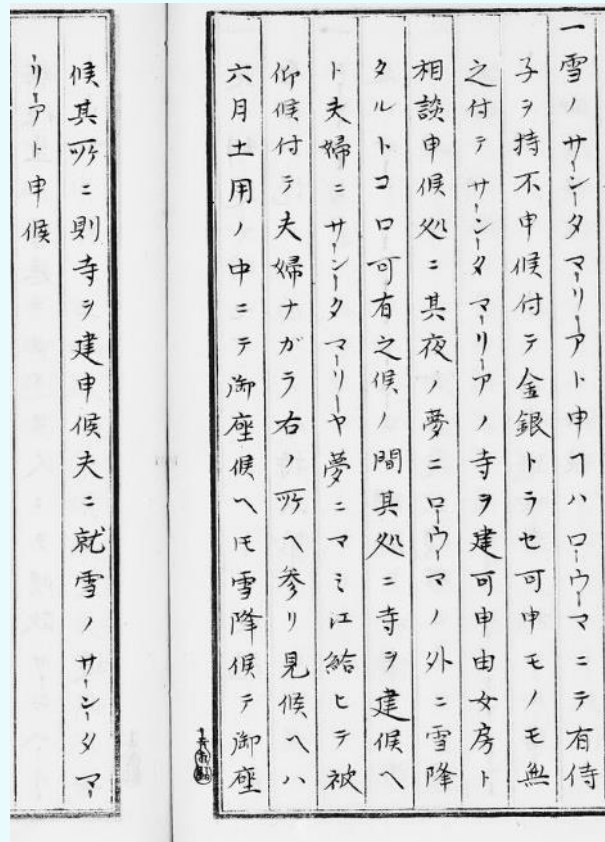
三タ丸屋は、なんのこともわからないままこの世に降りてきたが、二月の中ごろのある日の夕暮れ時、大天使が蝶の姿に身をかえて、丸屋の口のなかに飛びこんだ。すると丸屋は、たちまち身重になった。

身重を親に知られて追いだされた丸屋はベレンの国で、大雪の中、農家の牛馬小屋で赤子を産む。

牛馬は息を吹きかけて赤子を暖めまもり、そのお礼に丸屋は、かるたの日(水曜日)ぜじん(断食)して肉食しないと誓う。

農家の女房が三日後、赤子を見つけ家に入れて、織っていた布を囲炉裏にくべてもてなした。

(谷真介著『キリシタン伝説百話』から引用)



『契利斯督記』*中の「雪ノサンタマリア」の記述
サンタマリア・マジョーレ教会の由来譚がある。
(*初代の宗門改役井上政重が後任の北条正房に引き継いだ折の留書や禁教法令などをもとに1797年(寛政9)福山藩儒学者太田全斎が編集した記録書)

「雪のサンタマリア」-8

児嶋由枝氏の論文に添えられた口絵、フランコフォンテの「雪の聖母」板絵を見ると、聖母の容貌などの作風は異なりますが、髪を描き方、顔を左前方に傾けて手を合わせた姿勢や、衣の構図と色使いは一致しています。

合わせた手の下には幼子イエスの寝姿と思われる像があり、当時よく見られた聖画の構成であったのですが、板絵は損傷が激しく、横たわる幼子の図像ははっきりせず、頭上の冠などは失われています。



フランコフォンテの板絵はなぜこのように傷みが激しいのか、それはまさしくこの板絵の発見の奇跡に由来する故でした。

その奇跡譚は、以下の話です。

「フランコフォンテと近隣の町ヴィッツイーニの猟師が鎌で草刈りをしていた時、鎌の先が草むらの中の聖母像に当たり、その鎌の刃による破損箇所からは血が滴り落ちていました。

両方の町の住人が自分の町に持ち帰ろうと牛車に乗せ、牛がどちらに向かうか見ることにします。

すると牛はフランコフォンテに向かって進みました。そして、8月5日の真夏であったのに、雪が降ってきたのです。」

これは1570年ごろの話で、「シチリアの奇跡の聖母」として有名になったそうです。

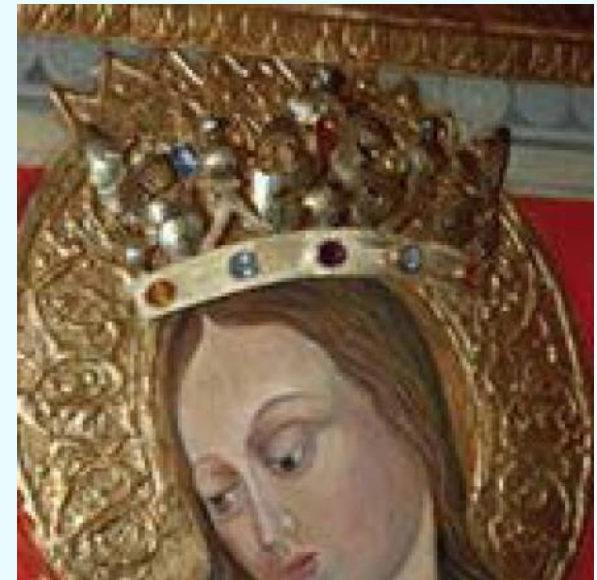


フランコフォンテの「雪の聖母」板絵（児嶋由枝論文の口絵から）

「雪のサンタマリア」 -9

16世紀末から17世紀に、日本に渡ってきたたくさんの版画や複製画の中に、このシチリアの「雪の聖母」複製画もあったに違いなく、この奇跡の聖母像をモデルに、画学舎出身の日本人画家が描いたのであろうと、児嶋由枝氏は述べています。

外海の「雪のサンタマリア」の青い紙による補修部分は、シチリアの「雪の聖母」の破損部分に対応していることも興味深いことで、完全な姿の絵画が潜伏中の礼拝行為で損傷・補修されたのではなく、奇跡的に発見された元絵の傷んだ状態に基づいた信仰の姿であったのです。



復元された「雪の聖母」の冠
フランコフォンテの板絵複製画から
(児嶋由枝論文の口絵から)

「シチリアの奇跡の聖母」と共通する構図の聖画



重要文化財「花鳥蒔絵螺鈿聖龕」（九州国立博物館蔵）
中の「聖家族」を描いた聖画は日本から輸出された先のヨーロッパなどで製作されたものと見られる



「二人の聖人とキリストの子を崇める聖母」ポスター

「雪のサンタマリア」-10

この図像を持ち込んだのは、シチリアのフランコフォルテの貴族出身のドメニコ会士 ヨルダノ・アンサロネ神父と推定されます。

ヨルダノ神父は、1632年に禁教下の日本に潜入し、厳しい役人の目を逃れて大村や外海でひそかに布教しましたが、捕らえられて1634年11月17日、長崎の西坂で殉教し、1987年10月18日ローマで列聖された宣教師でした。

シドッチが「親指の聖母」の絵を持参して潜入したように、ヨルダノ神父も故郷の「雪の聖母」複製画を大切に携えてきたのでしょう。



「聖ヨルダノ・アンサロネ司祭」像
(後ろは、ヨルダノ神父と共に殉教した「聖トマス西司祭」の像)

「聖トマス西と十五殉教者顕彰の碑」
長崎・中町教会の記念庭園
(「村内伸弘ブログ」の画像から)

外海の「雪のサンタマリア」が描かれたのヨルダノ神父が潜入した1632年以降、禁教の最中であつたと思われます。

コーラの弟子の日本人画家たちは、洋画の確かな技法の中に日本的な自然でたよやかな筆使いの聖画を描き、それは潜伏キリシタンの心のよりどころとなり、そして現在にその信仰の歴史を残してくれました。

外海のキリシタンは、潜伏中、「バスチャンの日繰り」と呼ばれる典礼暦を伝承し、毎年更新される活きた暦の中に、キリストや聖マリアの生涯を偲び祈る信仰生活を続けてきました。

その中に「雪のサンタマリア」と口伝された掛け軸が伝えられたことは、16～17世紀のヨーロッパでよく知られた8月5日のローマの雪の奇跡譚、そしてそのローカルなバリエーションであるシチリアの「雪の聖母」板絵とそれを伝えた宣教師への篤い思いが込められていたからでしょう。

傷ついた聖母像、それはいつか奇跡を現す日が来ると、その身をもって、隠れのキリシタンたちを慰め続ける存在であつたのだと思いました。